

## 質問紙調査「教科音楽の思い出・印象について」の分析と考察

他専修（音楽専修生を除く）学生の回答結果に着目して

伊藤 誠 埼玉大学教育学部音楽教育講座

キーワード：初等教科専門科目、打楽器、読譜能力、文部省唱歌、音楽専科教員

### 1. はじめに

本稿は、平成22年度前期（3・4限）および後期（1・2限）の授業「音楽科指導法A」において、「主に、教科音楽の思い出・印象について」というタイトルで実施した質問紙調査（全19の質問からなる）の結果を、さまざまな角度から分析したものである。本調査については、4年ほどの試行期間を経てほぼ質問内容が決定したことから<sup>1</sup>、今年度この講義を履修した学生たちの回答結果をまとめることにした。

前期は4月19日（月）に、後期は10月18日（月）にそれぞれ授業の中で実施した。この両日とは別に、教育学部2年次生の音楽専修生23名（うち1名は留年生）に対しては「音楽科指導法D」の授業で、また筆者が非常勤講師として勤務する東京音楽大学3年次生49名（ほとんど器楽ピアノ専攻の学生<sup>2</sup>）に対しては「音楽科教育法」の授業で、この調査に協力してもらった。日頃「音楽」との関わりがいっそう強い彼らと、指導法Aを履修した221名（いわゆる他専修の学生）との回答結果を比較するうえで、有益なデータが得られると考えたからである。

この質問紙調査の趣旨を理解してもらううえで、一人ひとりの「現状と本音」を知りたいため、隣同士で相談しないことを伝えた。また各自のペースで勝手に書かせることを避けるために、筆者がすべて質問文を読み上げながら、一問ずつ慎重に回答させていった。質問内容によっては補足説明をしたり、途中で区切りながら質問時間を適宜設けたりした。質問用紙（全3頁）および回答用紙（1頁）は、巻末に表5（66%に縮小）としてそれぞれ全文を載せたので参照されたい。

### 2. 問題の所在－音楽科指導法Aの位置付け－

この授業は、初等教科専門科目のなかの教科指導法の一つであり、学校教育教員養成課程の3コース（全16講座）に在籍する学生にとって、卒業要件に関わる半期2単位の必修科目である。筆者はシラバスのなかで「音楽科教育担当のために必要な理念・知識・意欲を、学生諸君から引き出し育てたい。」という一文を本授業の「教育目的・目標」の欄に明記している。教科教育法の性格から、数回にわたる模擬授業の時間も大切な内容であるが、教科である以上（たとえ“音を楽しむ”と書く教科名をもつものの）そこにはさまざまな規範や約束事が内在することをもっとも伝えたいと考えている。ところが、それをどう子どもたちに伝えられるかとなったときに、そつの無い授業を行う方法だけを模索し躍起になる学生が多く見られる。音楽の場合、果たしてこの姿勢でよいのだろうか。ここが実技系教科のむずかしいところである。芸術の本質にせまる授業を行うにはどうすればよいだろうか。

この難題は、西洋音楽の魅力とは何か、と置き換えることもできるだろう。筆者のささやかな演奏体験から顧みれば、17世紀後半からの時代様式に触れようとすると、どうしても楽典（音楽理論）に触れないわけにはいかないのである。彼らは、これまでにどんな音楽体験をしてきているだろうか。義務教育9年間の音楽の成績はどうだったのだろうか。おそらく、機能と声の世界に浸りながら音楽を表現したり鑑賞したりした機会は多かったわけだから、簡単な楽譜ならば階名付けや調判定はできるのではないか。毎年度履修する120名程度の学生（主に2年次生）の教科音楽にまつわる思い出や印象について、まずは彼らと音楽との関わりを把握したうえで授業を行う必要があると考えたのである。

### 3. 先行研究との関連

これまでに、音楽科教育における教科指導法に関する論文は数多く発表されている。たとえば、来年（平成23年）度から全面実施される学習指導要領に新設された〔共通事項〕を踏まえて、音楽の諸要素と創造的に向き合うような学習指導案づくりに焦点をあてた研究（新山王・滝藤 2010）、あるいは音楽科教育法の授業内容を取り扱う学習活動の視点を見直すうえで、新しい学習指導要領に基づいたバランスのとれた指導計画を作成させるための研究（酒井 2008）等をあげることができる。授業を通して、実践力を身に付けるための知識や技術を生かしたうえで、周到な計画と工夫あふれる模擬授業の実現を目標にすえて、学生たちへの教育が各大学で日々展開されていることは言うまでもない。しかし半期15時間しかない授業において、多様な活動内容のデモンストレーションをはじめ、学習指導案の作成方法、教育実習や教員採用試験の対策、さらには今日的課題としてさまざまな音楽文化の紹介や、音楽科と他教科との関連についても触れなければならない。

さらに〔共通事項〕とともに、「言語活動の充実」も今次の学習指導要領改訂の目玉商品の一つとしてあげられる。関連する学会誌にも「言語力の育成をめざしたこれからの教科教育：音楽科授業における言語力とは何か」と題するシンポジウムの報告（三村 2009）が掲載されている。鑑賞領域においては「言語活動の充実」が特に求められるであろうが、学習手段としての言語力と相俟って、音楽活動の基礎となる言語力（＝音楽科固有のテクニカルタームを含めた言語力）の育成こそが求められている。

平成20年度改訂の第8次学習指導要領では「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」の理念がそのバックボーンにある。音楽科改訂の要点にスポットがあてられた上記の3例は、新しい時代到来の時期としてタイムリーな研究テーマである。日々学生たちと関わりをもつことも、いろいろな情報を得る手段となる。そうであるならば、もう少し学生の本

心や真意を聞いてみるのも、まんざら捨てたことではあるまい。講義形式の授業では（気を付けてはいえるものの）どうしても一方通行になりがちである。彼らの教科音楽についての意見を、質問紙調査を通して少しでもつかんでおけば、この授業科目の存在意義について、筆者自身の考え方も少しは変わるのではないかな。こんな気持ちがふつふつとわいてきたのである。

残念ながら、当該分野において類似する方法でアプローチされた研究を探し当てることはできなかった。ただ楽しいだけの授業をめざす前に「音楽」について知るべきことは何か。音楽作品のなかに込めた作曲者の意図や仕掛けとは何か。いわゆる楽曲の仕組みに気付くような感覚が教える側になれば、少なくとも西洋機能利和声の音楽を教えることはできないだろう。換言するならば、豊かな表現力の実現には、その手がかりとなる思考力の育成が不可欠ではないか。「長い伝統のうえに築き上げられた芸術は奥深い」のである。

### 4. 質問紙調査の集計と分析

<表1> 質問紙調査対象者の内訳

		合計人数 293	男 134	女 159
埼玉大学	教育心理カウンセリング	28	9	19
	コラボレーション	17	2	15
	社会	54	39	15
	理科	42	29	13
	音楽	23	4	19
	美術	16	4	12
	保健体育	21	15	6
	技術	13	6	7
	英語	22	19	3
	その他	8	5	3
東京音大	声楽	4	1	3
	ピアノ	44	0	44
	その他	1	1	0

表1は、今回の調査に協力してくれた学生の内訳である<sup>3</sup>。所属する大学・専修（専攻）、そして性別に分けてそれぞれの人数を示した。合計人数では、女子が男子を25名ほど上回っている。特に音楽専修（専攻）生だけを比較すると、男子が6名であるのに対して女子は66名である。男子が女子を上回っている講座は社会、理科、保健体育、英語の4講座のみである。

#### 4-1 ピアノ学習経験の有無

表2は、埼玉大学音専生（以下「埼大音専生」という）と東京音大生（合計72名）を除いた学生（以下「他専修学生」という）の、ピアノ学習経験の有無に関する講座別集計である。ただし高校卒業までの時点で1年以上学習していること、また途中ブランクがあったとしてもトータルで1年以上勉強したことを条件とした。各セル内のカッコの数は、各枠内の合計数である。

音楽に関係する学生を除くと男子が128名、女子が93名となるが、そのうちピアノ経験をもつ学生は、男子が31名に対して女子は66名である。予想通りの結果とはいえ、男女で大きな差が表れた。全体では44%にあたる97名の学生がピアノを経験していることがわかった。

<表2> 他専修学生のピアノ学習経験の有無

		全 体	男	女
埼 玉 大 学	教育心理カウ	13 (28)	1 (9)	12 (19)
	コラボレーション	11 (17)	0 (2)	11 (15)
	社会	17 (54)	7 (39)	10 (15)
	理科	23 (42)	12 (29)	11 (13)
	美術	7 (16)	0 (4)	7 (12)
	保健体育	8 (21)	4 (15)	4 (6)
	技術	7 (13)	1 (6)	6 (7)
	英語	6 (22)	4 (19)	2 (3)
	その他	5 (8)	2 (5)	3 (3)
	合計	97 (221)	31 (128)	66 (93)

#### 4-2 ピアノ経験者の実情

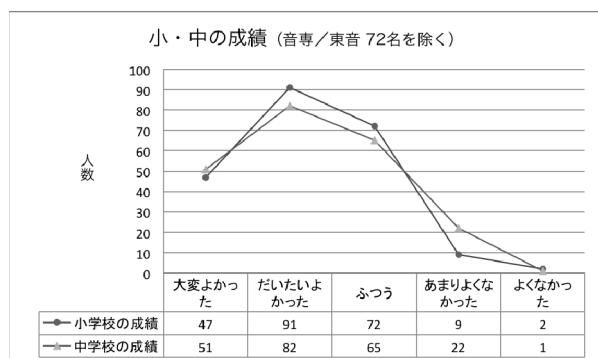
<表3> 質問3の(ウ)(エ)(オ)について

		( ): 男性	へ音記号が読める	バイエルを学習した	今は習っていない
埼 玉 大 学	教心	13 (1)	12 (1)	7 (0)	13 (1)
	コラボ	11 (0)	9 (0)	9 (0)	10 (0)
	社会	17 (7)	14 (4)	11 (4)	16 (7)
	理科	23 (12)	19 (9)	13 (6)	22 (12)
	美術	7 (0)	7 (0)	2 (0)	7 (0)
	保体	8 (4)	7 (4)	5 (2)	8 (4)
	技術	7 (1)	2 (0)	3 (0)	7 (1)
	英語	6 (4)	4 (2)	3 (2)	6 (4)
	その他	5 (2)	4 (1)	5 (2)	5 (2)
		97 (31)	80.4%	59.8%	97.0%

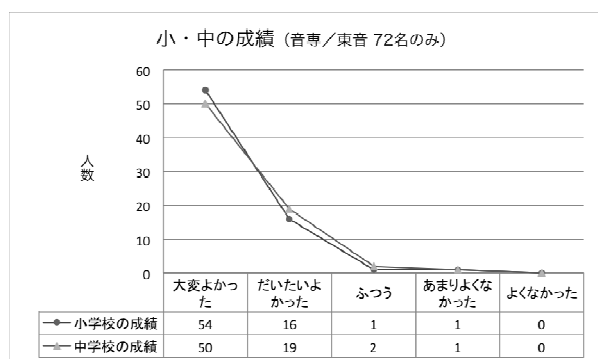
ピアノ経験者97名をピックアップして、彼らが質問3のなかの3つの問いにどう回答しているかを調べた。表3はその結果である。カッコ内の数字は、それぞれの枠内のなかで男子が占める数である（表2で扱ったカッコの意味とは異なる）。まず「へ音記号が読めるか」についてであるが、意外にも全体の20%（19名）の学生が読めないと答えている。1年以上ピアノを学習していながらこの結果をどう解釈すればよいだろうか。ト音記号だけの大譜表で1年以上過ごしたのであろうか。奇異に感じたため、この19名が質問18（ア）「音部記号（ト音記号やへ音記号のこと）の意味や役割は理解できますか。」にどう回答したかを調べた。すると「どちらの音部記号も分からない。」という選択肢を6名が選んでいる。ますます不可解な結果と言わざるを得ない。

2つ目の質問「バイエルを使って勉強した時期はありますか」についてであるが、ほぼ6割の学生がこのピアノ教則本を使ったと答えている。わが国では依然として用いられていることがわかる。バイエル批判があるなか「根強い人気」ということができるだろう。もう一つの質問は「現在もピアノの勉強を続けているか」である。残念なことに97%にのぼるほとんどの学生が、今はやめてしまった（男子は31名全員が、現在は習っていない）と答えている。

#### 4-3 教科音楽の成績分布



<図1-a> 小中時代の教科音楽の成績分布  
( 埼大音専生と東京音大生を除く221名)



<図1-b> 小中時代の教科音楽の成績分布  
( 埼大音専生と東京音大生 72名)

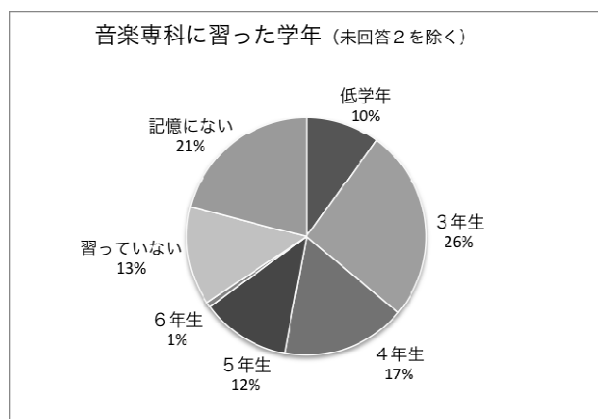
両者のグラフは、対照的な結果を表している。対象となった学生数（221名と72名）に開きはあるものの、はっきりとそこに両者の特徴が出ている。幼い頃から、音楽と関わる環境のなかで育てられたであろう埼大音専生や東京音大生の成績は、数名を除いてそのほとんどが「よかった」ことが分かる。それに対して他専修学生の成績は「だいたいよかった」や「ふつう」が「大変よかった」を上回っている。また「あまりよくなかった」の成績が、小学校よりも中学校の方で増えていることも少々気になる。

両表とも、小中のラインの形が似通っていることも印象的である。図には現れていないが、詳しく調べてみると、小学校のときに成績が芳しくなかった学生は、中学校でもその成績を引きずっていることがわかった。しかし他専修学生の成績全体から受ける印象としては、

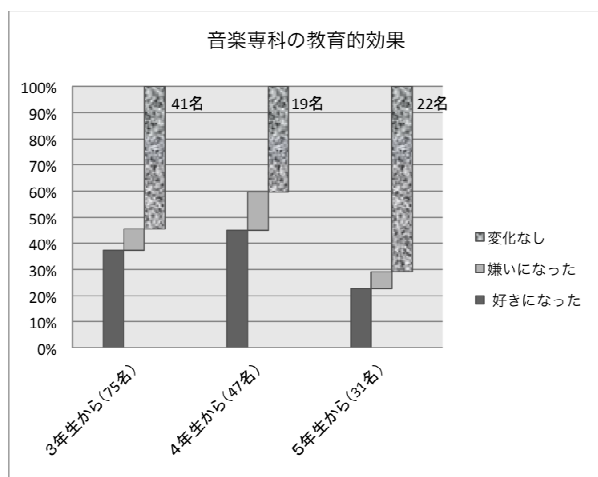
比較的よい結果ではないだろうか。確かに「大変よかった」学生は、小中ともに2割程度ではあるが、「ふつう」以上の学生で割合を出してみると、それぞれ全体の90%（中学校時代）から95%（小学校時代）を占めているからである。

#### 4-4 音楽専科教員の影響

以下3つの図から、この結果を考察してみたい。音楽専科に習ったかどうか「記憶にない」学生が2割もいたことは残念である（グラフは、回答がなかった2名を除く291名の結果である）。



<図2> はじめて音楽専科教員に習った学年

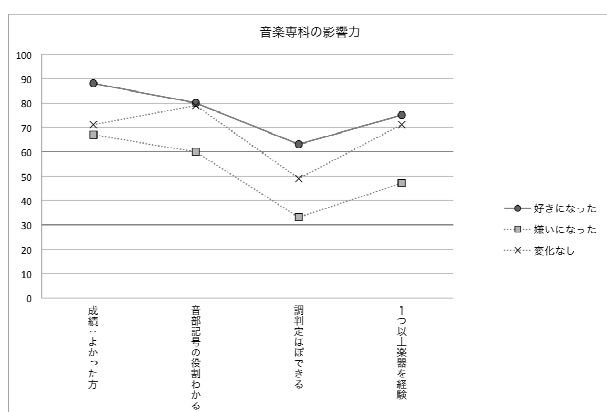


<図3> 音楽専科教員に対する評価

大雑把な聞き取りの内容ではあるが、そもそも指導効果があったのかどうか、その評価基準として「専科教員の指導によって教科音楽を受けるあなたの意欲・

態度に変化がありましたか」と質問して、3つの選択肢を設けた。図3はその回答結果である。

図2で比較的に回答数が多かった3年生、4年生、5年生について調べた。100%積み上げ縦棒のグラフによって表してみたが、今回の調査では回答数が多かった3年生より、4年生で習った47名のなかで「音楽が好きになった」の割合が高くなっている。3年生と5年生では「教科音楽が好きになった」が「別段、変化はなかった」を下回った。3つの凡例のうち、5年生で嫌いになった割合が低い値を示したが、反面で好きになった値も低いことが分かった。



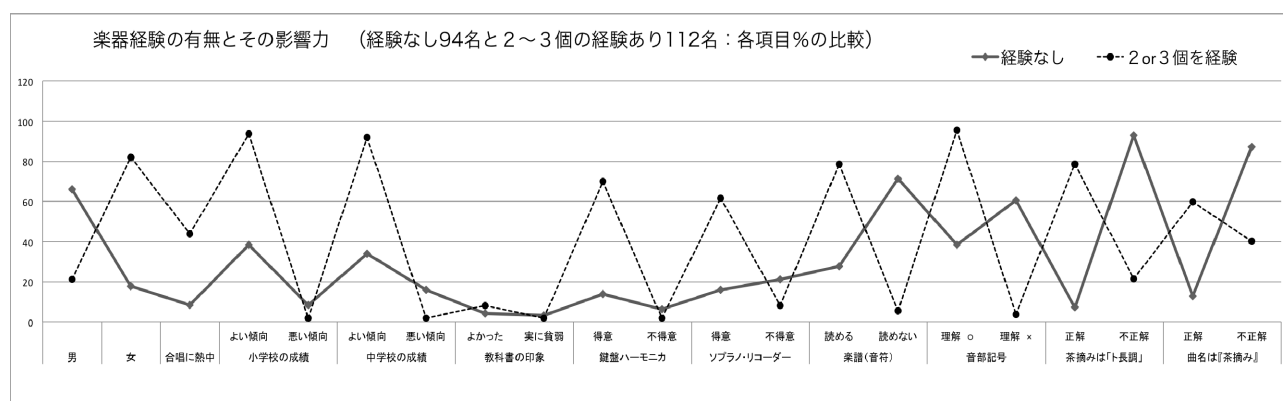
<図4> 音楽専科教員の具体的影響力

較してみた。その具体的な項目とは、(1)成績が「大変よかった」「だいたいよかった」と答えた2つのグループを合わせたもの、(2)2つの音部記号のうち、片方の意味や役割が理解できると回答したもの、(3)調判定が「できる」「できる時もあるができない時もある」の2つを合わせたもの、そして(4)質問2で一つ以上の楽器の学習経験をもつもの、以上の4つである。

音楽専科教員の影響がマイナスにはたらいってしまった「教科音楽が嫌いになった」群は、4つの具体的項目のいずれも「好きになった」「変化なし」の両群に比べて割合が落ちている。当然の結果といわざるを得ない。一方、影響がプラスに転じた群の特徴といえば、総じて小中9年間の成績がよかった学生が多いことと、それが直接の影響を与えたかどうか不明だが、楽器経験を持っている者が多いことである。

#### 4-5 “楽器経験の有無”がもたらす影響とその効果

音楽専科教員の影響力をより具体的な形で示すために、4つの項目(図4)について3つの選択肢別に比



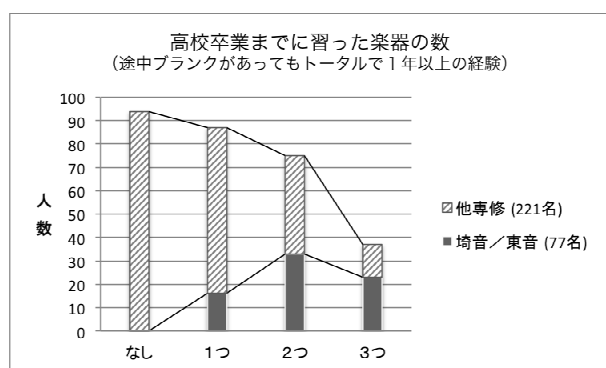
<図5> 楽器経験の有無が影響を与えた10項目の比較分布

図5は、楽器経験のまったくない194名の学生と、複数の楽器経験をもつ112名の学生の、各項目別に表した人数分布である。男子では、経験のない学生が経験をもつ学生を上回っているが、女子ではまったく逆の結果である。ただし気になるのは、女子のなかで、男子以上に楽器経験の有無の差が大きいことである。

さて、両者の差が大きい項目をチェックしてみると、楽譜が読めるか読めないか、音部記号の意味や役割を理解しているかどうか、《茶つみ》という文部省唱歌の調判定ができるかどうか、この3項目（すべて読譜に関する内容）で大きな開きが生じている。また小中の成績の良し悪しや、鍵盤ハーモニカの得意不得意にも同じくらいの差を見出すことができる。

両者の差がほとんど見られないのは、小中の成績が芳しくなかった、音楽教科書の印象が実に貧弱だと思った、鍵盤ハーモニカは苦手だった、という3つの項目である。しかし、いずれも人数の少ないところで推移している。意外だったのは、楽器経験をもつ学生たちのうちで、中高時代に合唱に夢中だったと回答した数が少ないことである。しかし今回の調査内容からは、その根拠を見出すことはできなかった。

図6は、それを埼玉音専生+東京音大生(77名)と、他専修学生(221名)とで比較したものである。このグラフの結果から、図5で取り上げた「経験なし」の94名は、すべて他専修学生であることが分かる。



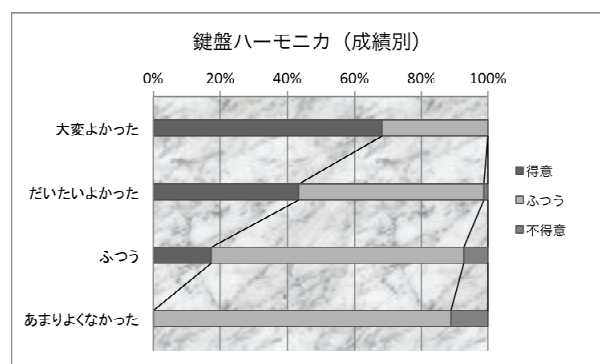
<図6> 高卒までに1年以上学習した楽器の数

しかし、他専修学生のなかで1つ以上の楽器経験をもち学生の場合は127名で、未経験の94名を大きく上回っていることも分かった。

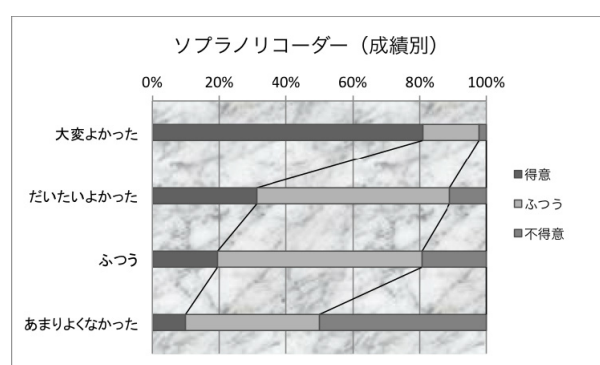
#### 4-6 2つの教育用楽器の得意・不得意 (小学校の成績との相関関係)

図7の2つのグラフは、鍵盤ハーモニカとソプラノリコーダーについて、成績の良し悪しと楽器の得意・不得意との間の相関関係を表したものである。他専修学生のみを対象に調べたわけだが、おおよそ同じような結果となった。

鍵盤ハーモニカの方は、ソプラノリコーダーに比べて不得意の割合が低いことがわかる。成績がよくなるにつれて「得意」の割合がアップする。それに反比例して「ふつう」の割合はダウンしている。相関関係が美しくあらわれたグラフと言えるだろう。



<図7-a> 鍵盤ハーモニカ



<図7-b> ソプラノリコーダー

それに対してリコーダーのグラフでは、成績が「あまりよくなかった」に限って、不得意の割合がふつうの割合を大きく上回っている。鍵盤ハーモニカに比べてリコーダーを苦手とした学生が多いことが分かるが、



成績が「大変よかった」学生に限っては、逆に得意の割合が鍵盤ハーモニカよりも高い。

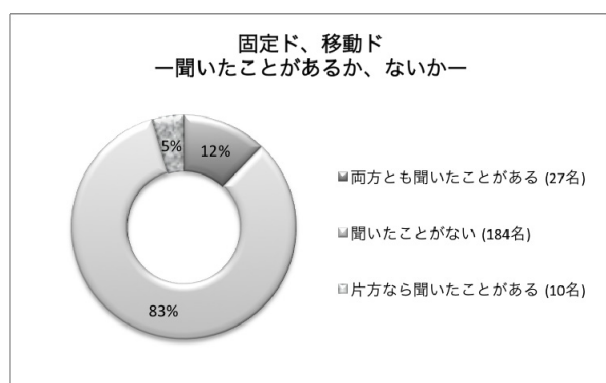
細かい点を見比べたとき、それぞれの特徴を見出すことはできるが、総じて成績がよければよいほど、どちらの楽器も得意だった学生の割合は高くなる、という点では共通しているのではないだろうか。

#### 4-7 文部省唱歌《茶つみ》をめぐって

##### (1) 2つの唱法の違いの理解度

これも他専修学生のみでの分析結果であるが、そもそも「固定ド」とか「移動ド」という言葉を聞いたことがあるかどうかについて質問した結果が図8である。全体の83%にあたる184名の学生が、これらの用語を聞いたことがないと答えた。また「両方とも聞いたことがある」「片方なら聞いたことがある」に回答した37名のうち、両者の違いを少しでも説明できる学生はわずか14名に留まった。

彼らは、階名唱をする意義（そのとき楽譜を介在させるかどうかは問わないが）について学ばなかったのだろうか。すでに記憶したメロディに階名をのせて歌うとき、自ずと相対的な音の高低感を意識するような学習を、いろいろな歌唱教材を通して経験していたとすれば、移動ド唱法の大切さを実感したはずである。ここでは両者の唱法の是非については問わないが、せめて2つしかない唱法の長所と短所ぐらいは知っておく必要があるのではないだろうか。

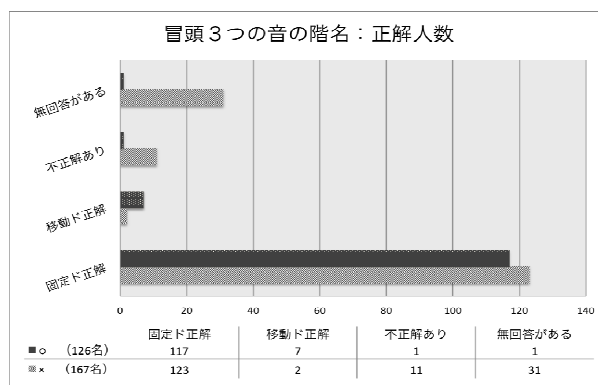


<図8> 2つの唱法の違いが説明できるか否か

##### (2) 階名づけの正答率

本調査最後の質問事項として、《茶つみ》の楽譜（歌のパート譜のみ）を示したうえで読譜能力を問う内容で設問をつくった<sup>4</sup>。図9は、5つの問題のなかの一つ「1小節目（曲の出だし）の、4分休符のあとの3つの音にそれぞれ階名をふって下さい。」という出題に対する回答結果である。

この曲の調判定の正解者と不正解者に分けて、図内・グラフエリアの下部分に記載したデータを横棒のグラフに表した。この結果は、埼大音専生と東京音大生の回答を含んでいる。興味を引かれる点として、(1) 調判定ができる・できないに関わらず、階名付けについては比較的高い確率で正解していること、(2) 移動ド唱法を意識して「レ・ソ・ラ」で解答した学生がきわめて少ないこと、以上2点をあげることができる。当然の結果かもしれないが、調判定ができなかった学生167名のうち、ほぼ4分の1にあたる42名が間違った答え（もしくは無回答）を書いていた。



<図9> 冒頭3つの音の階名付け

(「ト長調」正解者・不正解者別)

では、全体(293名の回答)から他専修学生の結果だけを抜き出してみよう。221名のうち調判定ができた学生は57名(25.8%)だったが、そのうち固定ド読みで正解した者が53名、移動ド読みで正解した者が2名、残り2名は不正解であった。このように他専修学生だけを取り上げても、調判定ができれば、かなり高い確率で階名付けもできることが分かる。しかし(オ)で、「上記(エ)の質問に対して「移動ド唱法」を意識して解答しましたか。」という問いに対しては、34名が

選択肢の一つである「質問の意味が分からない。」を選んでいて、やはり唱法の本質、階名唱する意味について再考する必要があるのではないだろうか。

### (3) 楽典を学習する機会の有無

ところで、読譜が苦手な学生は、音楽の授業で学習する機会がなかったのだろうか。そこで「音部記号の意味も役割も分からない」64名と、「その質問の意味がそもそもわからない」12名、および「楽譜を見て、その楽曲の調判定ができない（音部記号の意味や役割は分かる）」61名に対して、「小中時代9年間で振り返って、授業で楽譜の読み方（いわゆる楽典）を勉強する機会がありましたか」（質問18（ウ））と問いかけてみた。その結果が表4である。

<表4> 「義務教育9年間のなかで楽典は勉強しましたか」

	学習した	学習しなかった	記憶ない	無回答
76名	35	11	29	1
61名	24	9	13	15

両群の合計は137名である。読譜能力にはあまり自信がない彼らだが、義務教育9年間のなかで「学習した」と答えた学生は59名であった（網掛けセルの部分）。この数を多いと感じるか少ないと感じるか。しかし「学習しなかった」とはっきり意思表示をした学生は20名不足である。「記憶にない」と答えた学生は42名、そして回答しなかった学生は16名もいる。あいまいな選択肢を選んだ両者の合計は58名となり、学習したに身に付かなかった学生の数とほぼ同数である。

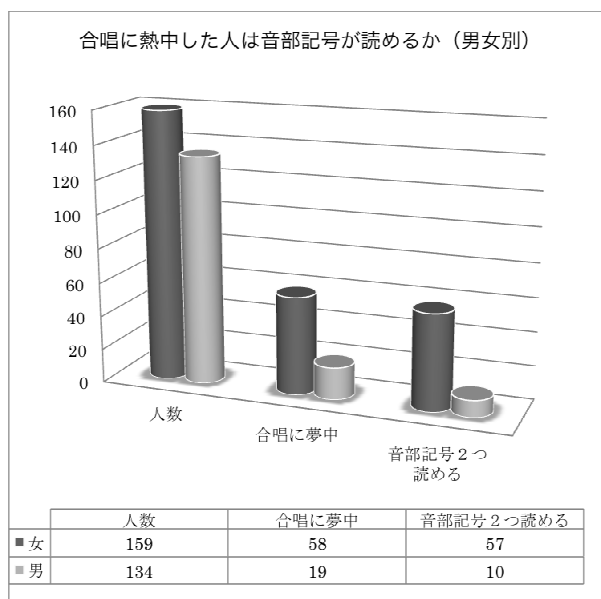
要するに、この内訳は「学習した」が43%、「しなかった」が15%、そして「記憶なし」（無回答を含む）が42%となる。やはり、学習したが身に付かなかったと回答した43%の学生が気になる。小学校時代の成績の自己評価も決して悪くない。両群合わせた137名のうち、成績が「あまりよくなかった」「よくなかった」学生は9名しかいないのである。しかし82名（約6割）の学生が「楽器経験はまったくない」と答えている。このことから、楽譜を読むことにコンプレックスを抱いていたことは想像に難くない。もちろん「ふつう」以上の成績をおさめた彼らの学力に対しては一定の評価をしたいと思うが、それならば、何故読譜能力が身に付

かなかったのだろうか。おそらく、それは彼らを教えた教師の、教科音楽に対する指導観の希薄さを感じないわけにはいかない。

### (4) 《茶つみ》に関するその他の結果

《茶つみ》は、現在でも小学校3年生の歌唱共通教材の一つとして指定されている。彼らは平成元年告示、平成4年（1992）全面実施の学習指導要領で教育を受けた世代であるが、当時もこの曲は教科書に掲載され歌われていた。すなわち、小学校音楽の授業で歌った（学習した）はずである。しかし今回の調査で、曲名の正解人数は111名（全体の38%）、冒頭一番の歌詞の正解人数は103名（35%）、両方とも正解した人数は80名（27%）だった。80名のうち、男子はわずか11名にすぎない。それは、80名のうち33名が埼玉音専生と東京音大生であり、33名全員が女性だからかもしれないが、正解した他専修学生の内訳も女子36名に対して男子11名となり、男女差で大きな開きが出る結果となった。

## 4-8 中高時代、合唱に熱中した77名の調査結果



<図10> 中高時代に合唱が好きだった学生

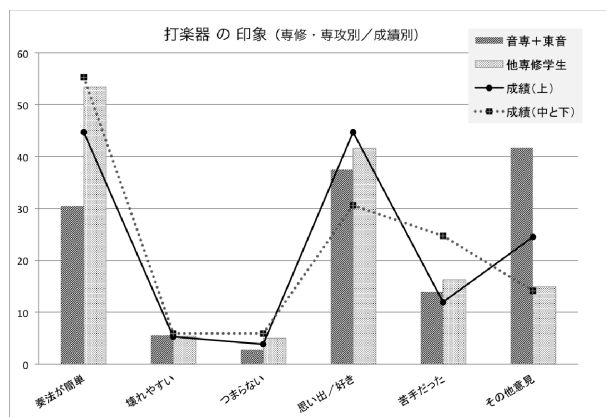
前述の結果のように、性別で大きな差を確認したところであるが、中高時代に合唱が好きだった学生の男女の比率にも開きがあることがわかった。図10のように、全体では女子の人数が25名上回っているわけだが、合唱に熱中した人数では、女子が58名に対して男子は



わずかに19名しかいない。男子134名のなかの貴重な19名ということができるだろうが、不可解なことがここでも現れた。

合唱に夢中だった19名全員のうち、どうして2つの音部記号の意味や役割を理解していたのが10名しかいないのだろうか。中高時代、合唱に熱が入っていたのならば、当然へ音記号の楽譜と向かい合ったはずである。“脱落した”9名は、ほんとうに合唱に燃えていたのだろうか。男子に比べて女子は、1名を除いて「2つの音部記号とも理解」して合唱を楽しんだようである。おそらく女子は、合唱における自分たちの(ト音記号で書かれた)パート譜だけでなく、ヘ音記号で書かれた男子のパートの動きも視野に入れながら、美しいハーモニーを求めたのではないだろうか。男子も少ないなら少ないなりに、合唱に夢中だった19名全員が、両方の音部記号の意味や役割を理解していても何ら不思議ではない。女子の結果には満足を感じるが、男子の結果には疑問が残ったのである。

#### 4-9 打楽器の思い出



<図11> 打楽器に対する思い出、印象

まず、埼大音専生+東京音大生と、他専修学生とに分けて、打楽器についての印象を6つの選択肢別に集計して縦棒グラフに示した。次に小学校音楽の成績の「大変よかった+だいたいよかった」と「ふつう以下」とに分けて折れ線グラフに示した。図11は全体のデータを、分析する切り口(凡例)を変えて複合グラフのスタイルで表している。縦軸の単位は%である。

特に小学校の頃、いろいろな打楽器は、彼らにとって楽器のなかでもっとも身近な存在だっただろう。専修(専攻)別の結果から気付くことは、選択肢のなかで「奏法が簡単」と「その他の意見(自由回答)」との間で両者に大きな差が出たことである。いろいろな解釈ができるだろうが、音楽に携わってきた学生にとってはある種のこだわりを持っていて「奏法が簡単」など一言で「簡単」に切り捨てられる楽器ではない、と言わんばかりである。その証拠に、72名のなかで30名が「その他の意見」を書いている(41.7%)。あらかじめ用意された5つの理由を、ただ選ぶだけでは気が収まらなかったようである。自由記述の意見を要約してみると「奏法が難しい(奥が深い/叩く人によって全然違う音が出る)」が8名、「リズム感が必要」が7名、少数意見では「原始的な感情に訴えかける楽器」「オーケストラを支える大切な楽器」「アドリブ演奏ができる能力が必要な楽器」などがある。冷静ななかにも鋭い指摘が感じられる。

他専修学生からも、221名中33名(14.9%)が意見を寄せてくれた。やはり「奏法が難しい(奥が深い)」が多かった。他に「曲の表情を豊かにする」「奏者の筋力が必要な楽器」「演奏の心臓部となる楽器」という打楽器の本質をつくような意見もあった。

今度は分析方法を変えて、打楽器の印象を成績別から見てみた。それほど両者の間で大きな差は見られないが、もっとも割合に差が出たのは「思い出がある/好きだった」の選択肢である(14.1ポイントの差)。次が「苦手だった」で12.7ポイントの差が出ている。いわばこの2つの選択肢は裏表の関係にあり、対照的な結果が出るのも至極当然といえるだろう。小学校の成績が「ふつう以下」だった学生は「大変よかった」あるいは「よかった」学生に比べて、楽器に対する苦手意識が強いようである。「3-6 2つの教育用楽器の得意・不得意」(図7)にもその兆候ははっきり表れていたように、打楽器に取り組もうとする意欲の多少は、成績の良し悪しと連関が深いと考えられる。その他としての自由回答でも、成績のよい群の208名中51名(24.5%)が何らかの意見を書いているのに対して、「ふつう」以下の成績群では12名(14.1%)しか具体的

な意見がなかった。この結果からも関心の強さにはっきりとした相違がみられる。

## 5.まとめ

選択回答と自由記述を盛り込んだ全19の質問からなる調査結果を、性別、専修（専攻）別、成績別など、切り口をいろいろ変えながら分析を行った。もちろん今回の調査を行ったことで、この授業でどんな目標を設定すべきか、またどのような指導内容を必要とするか等、自分自身に向けた課題解決への糸口がすべて見出せたわけではない。しかし教授する側としては、彼らのさまざまな音楽体験や、9年間受けた教科音楽の印象等について少しでも知っておかなければ、教科教育法（指導法）としての根本性格とは何かと問われたとき、自分自身の考えや信念を持つことができないと考えたのである。

質問紙調査の集計と分析の作業から、予想通りの結果が出たものもあれば、どう考えても不可解でない結果もあった。今回実施した調査では、前もって（学生にはその理由を話したうえで）学籍番号を書き入れてもらっており、たとえば質問内容の趣旨を誤解して回答したと思われる学生に対しては個人的に再調査をする手段は用意してあった。しかし調査の分析が年度末になってしまったため、再度の聞き取りを行う時間を確保することができなかった。確かに理解に苦しむ回答があったため、今さらながらそれを実行できなかったことが悔やまれる。

この大学生たちが義務教育を受けた時期は、新学力観の登場とともに、個性を生かす教育をめざして学習内容をさらに削減する政策がとられた頃に相当する。生活科が新設され、道徳教育の充実を目指して社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成が謳われた。スローガンこそ立派だが、人間成長のなかで学力形成のもっとも大切なときに、果たして十分な教育の保障が受けられた世代であったかどうか。教科音楽についても、西洋音楽の理解に不可欠な“音楽理論”という側面が大切に扱われなかったのではないかという疑問を抱くのは筆者だけではあるまい。

筆者が十数年にわたり担当している本授業の内容に関して、主に表現（歌唱、器楽、音楽づくり）領域や鑑賞領域における指導方法の講義、模擬授業やリコーダー実習等を中心にシラバスを構成してきた。基本的な流れは来年度も特に変わることはないが、この調査結果を踏まえて本授業の教育内容や指導手順を再考する必要はあるだろう。これを機に、具体的な授業実践を通して指導を改善していくための基礎資料となるように、今後も継続してこの研究を続けていきたい。

表5-1 「主に、教科音楽の思い出・印象について」質問用紙(1頁目)

(質問用紙)	平成 22 年 4 月 19 日
--------	------------------

音楽科指導法 A アンケート調査  
「主に、教科音楽の思い出・印象について」

質問 1 : それぞれの項目について答えて下さい。

(ア) 所属する専修名  
       4 : コラボレーション      8 : 社会      10 : 理科      18 : その他 (3つの専修以外、および他学部)

(イ) 性別      1 : 男性      2 : 女性

質問 2 : 今までに、どんな楽器を習った経験がありますか。高校卒業までの時点で1年以上学習した楽器に限り、3つ以内で答えて下さい。学校の部活で勉強した経験も含みます。また途中ブランクがあってもトータルで1年以上勉強した場合も含めて下さい。ただし音楽の授業で習ったリコーダー (たて笛) 等の教育用楽器は除きます。

1 : ピアノ	2 : 電子オルガン (エレクトーン)	3 : ヴァイオリン	4 : コントラバス
5 : フルート	6 : クラリネット	7 : オーボエ	8 : サックス
9 : トランペット	10 : トロンボーン	11 : ホルン	12 : チューバ
13 : ドラム	14 : マリンバ	15 : クラシックギター	16 : 三味線
17 : 箏 (こと)	18 : その他 (楽器名)		

質問 3 : 前の質問で「ピアノ」を選んだ人に質問します。複数選んだ楽器の中にピアノを含めた人も回答して下さい。

(ア) 高校卒業までに、トータルで約何年ピアノを習いましたか。

(イ) ピアノを2年以上学習した人にだけ質問します。特にピアノの勉強に打ち込んだ時期はいつ頃でしたか。1つだけ選択して下さい。

1 : 幼稚園 (保育園) の時期	2 : 小学校低学年の頃	3 : 小学校中学年の頃	4 : 小学校高学年の頃
5 : 中学時代	6 : 高校時代	7 : 浪人時代	

(ウ) あなたはヘ音記号の楽譜を読むことはできますか。

      1 : できる。      2 : できない。

(エ) あなたは「バイエル」 (ピアノの教則本) を使って勉強した時期はありますか。

      1 : ある。      2 : ない。      3 : 覚えていない。

(オ) 今も、継続してピアノを習っていますか。

      1 : はい。      2 : いいえ。

質問 4 : 歌の勉強をした経験はありますか。

(ア) 専門的に声楽の勉強をした経験はありますか。      1 : ある      2 : ない

(イ) 中学や高校の時に、部活などで合唱に夢中だったことはありますか。      1 : ある      2 : ない

質問 5 : 小学校時代6年間を通して、教科音楽の成績はいかがでしたか。

      1 : 大変よかった。      2 : だいたいよかった。      3 : ふつう。      4 : あまりよくなかった。

      5 : よくなかった。

質問 6 : 中学校時代3年間を通して、教科音楽の成績はいかがでしたか。

      1 : 大変よかった。      2 : だいたいよかった。      3 : ふつう。      4 : あまりよくなかった。

      5 : よくなかった。

質問 7 : 色々な打楽器について、どんな印象を持っていますか。2つ以内を選択して下さい。

1 : 奏法が簡単な楽器	2 : 壊れやすい楽器	3 : つまらない楽器
4 : 思い出深い楽器/好きだった楽器	5 : 苦手な楽器	6 : その他 (20 字程度で)

質問 8 : あなたにとっての「小学校時代の思い出の打楽器」は何ですか。自由に楽器名を答えて下さい。ただし2つ以内で (第1位と第2位を意識して) 回答して下さい。一つも思い浮かばなければ無記入で構いません。

質問 9 : 前の質問で、2つあげた人は「第1位」の打楽器について、1つしかあげなかった人はその打楽器について、それぞれあげた理由を簡潔に書いて下さい。

質問 10 : 小・中学校9年間を通して、音楽教科書についてどんな印象を持っていますか。次の5段階評価の中から1つだけ選択して下さい。

1 : “教科書” としてよくできている。	2 : ふつうのできればえ。	3 : 多少の不満はあった。
4 : “教科書” として実に貧弱である。	5 : 教科書の中味など記憶にない。	

質問 11 : 前の質問で「3」「4」を選択した人に質問します。その理由を 30 字程度でお願いします。

表5-2「主に、教科音楽の思い出・印象について」質問用紙（2 頁目）

質問 1 2：小学校時代、音楽専科の先生には何年生から習いましたか。

- 1：3 年生から      2：4 年生から      3：5 年生から      4：6 年生のみ      5：低学年から  
6：6 年間を通して、専科の先生からは習わなかった。      7：覚えていない。

質問 1 3：前の質問で「1」から「4」を選択した人に質問します。音楽専科の先生の指導によって教科音楽を受けるあなたの意欲・態度に変化がありましたか。

- 1：教科音楽が好きになった。      2：教科音楽が嫌いになった。      3：別段 変化はなかった。

質問 1 4：鍵盤ハーモニカについて、以下の（ア）から（オ）の質問に答えて下さい。

（ア）小学校（たぶん低学年や中学年）時代に学習した記憶はありますか。

- 1：学習した。      2：学習しなかった。      3：覚えていない。

（イ）前問（ア）で「1」を選択した人に質問します。鍵盤ハーモニカは得意でしたか。

- 1：得意だった。      2：ふつう。      3：不得意だった。

（ウ）前問（イ）で「3」を選択した人に質問します。むずかしく感じた点を 30 字程度でお願いします。

（エ）鍵盤ハーモニカを、すでに幼稚園（あるいは保育園）時代に学習した記憶はありますか。

- 1：学習した。      2：学習しなかった。      3：覚えていない。

（オ）鍵盤ハーモニカは、小学校低学年を対象にした教育用楽器として適当だと思いますか。

- 1：そう思う。      2：思わない。      3：わからない。

質問 1 5：小学校の時に学習したソプラノリコーダーについて、以下の質問に答えて下さい。

（ア）リコーダーは得意でしたか。

- 1：得意だった。      2：ふつう。      3：不得意だった。

（イ）前問（ア）で「1」あるいは「3」を選択した人だけに質問します。どんな点にむずかしさを感じましたか。最もむずかしかった理由を、以下から 1 つだけ選択して下さい。

- 1：楽譜が読めないために、要求される音が吹けなかった。      2：息の使い方がむずかしかった。  
3：指使いが理解できなかった。      4：穴のふさぎ方に苦勞した。      5：指が穴にとどかなかった。  
6：楽器をうまく支えられなかった。      7：その他（20 字程度で）

質問 1 6：「移動ド」「固定ド」について質問します。

（ア）（意味や内容はわからなくても……）これらの言葉を聞いたことがありますか。

- 1：ある。      2：ない。      3：片方ならばある。

（イ）両者の違いについて説明することはできますか。少しでも説明できそうならば「1」と回答して下さい。

- 1：できる。      2：できない。

質問 1 7：楽譜を見たとき、音符を読む方が得意ですか、コードネームという記号を読む方が得意ですか。

- 1：両方とも得意      2：音符の方が得意      3：コードネームの方が得意      4：両方とも苦手

質問 1 8：現在の「あなた」について質問します。楽譜は読めますか。

（ア）五線譜上における音部記号（ト音記号やヘ音記号のこと）の意味や役割は理解できますか。

- 1：ト音記号ならば分かる。      2：ヘ音記号ならば分かる。  
3：ト音記号でもヘ音記号でも、どちらも分かる。      4：どちらの音部記号も分からない。  
5：問われている質問の意味がそもそも分からない。

（イ）前問（ア）で「1」から「3」を選択した人に質問します。楽譜を見て、その曲の調判定ができますか。つまり、その曲が何調で作曲されているか分かりますか。

- 1：分かる。      2：分かる時もあるが、分からない時もある。      3：分からない。

（ウ）（ア）の質問で「4」か「5」を選択した人、（イ）の質問で「3」を選択した人にそれぞれ質問します。小中時代 9 年を振り返って、授業で楽譜の読み方（いわゆる楽典）を勉強する機会がありましたか。

- 1：あった。      2：なかった。      3：学習した記憶はない。

（エ）以下 2 つの質問は、（ア）の質問で「1」から「3」を選択した人、（イ）の質問で「1」か「2」を選択した人に回答をお願いします。

（エー 1）小中時代 9 年を振り返って、楽譜を読む力を「音楽の授業」の中だけで身に付けることはできましたか。  
1：はい。      2：いいえ。

（エー 2）前問（エー 1）で「2」を選択した人に質問します。小中時代 9 年を振り返って、読譜力を身に付けることができた一番の要因は何でしたか、以下から 1 つだけ選んで下さい。

- 1：習い事を通して。      2：部活の中で。      3：独学によって。  
4：知人・友人（学校外で）、あるいは身内から習って。      5：その他（20 字程度で）

裏面につづきます……↩

表5-3 「主に、教科音楽の思い出・印象について」質問用紙(3頁目)

質問 19: 以下の質問に答えて下さい。わからないところは無記入で結構です。

- (ア) この曲の調を答えて下さい(この曲は何調で できていますか)。  
(イ) 曲名を答えて下さい。  
(ウ) 冒頭の2小節間だけ「1 番」の歌詞を答えて下さい。  
(エ) 1 小節目(曲の出だし)の、4 分休符のあとの3つの音(1 から3 の番号が付いている)に、それぞれ階名をふって下さい。  
☞ 音符の順番(番号順)に従って、カッコ内にカタカナで書いて下さい。  
(オ) 上記(エ)の質問に対しては「移動ド唱法」を意識して解答しましたか。  
1 : はい。 2 : いいえ。 3 : 質問の意味が分からない。



#### 質問紙調査の趣旨

本アンケートの分析結果は、この授業の後半(日程は未定)で公表します。

集計作業と分析を行うのは、「音楽科教育研究 A」履修の音楽専修3年生中心の6名です。

彼らの分析結果の報告を受けて、伊藤がさらにまとめたうえで、皆さんに報告されます。

この「音楽科指導法 A」履修者に加えて、音楽専修生(2年生 22 名)にも、東京音楽大学の学生(主にピアノ科と声楽科に在籍する3年生 40 名ほど)にも、同じ内容で協力してもらいます。

(毎年おきることですが) 集計時に「回答の不備」が見つかり、そのためデータとして使えないことが 10 件ほどあります。今回は学籍番号のみ書いてもらいますので、不備なところが見つかり次第、その学生さんには照会をかけますので、そのときには再度協力をお願いします。

この結果と考察は、来年度の『大学紀要(教育学部)』で発表させていただきます。

一人一人の「現状と本音」を知るための一次資料になりますので、まわり(友だち)と相談しないで回答して下さい。

(音楽科指導法 A/3-4 限担当: 伊藤 誠)

表5-4 「主に、教科音楽の思い出・印象について」回答用紙

(回答用紙) 音楽科指導法 A アンケート調査：平成 22 年 4 月 19 日実施

質問 1 (ア) ( ) (イ) ( )

質問 2 3つ以内で…… ( ) ( ) ( )

学籍番号：

「18」を選んだ人……(具体的な楽器名：\_\_\_\_\_)

質問 3 (ア) (約 年)  
(イ) ( ) (ウ) ( ) (エ) ( ) (オ) ( )

質問 4 (ア) ( ) (イ) ( )

質問 5 ( )

質問 6 ( )

質問 7 2つ以内で…… ( ) ( )

「6」その他を選んだ人の意見……(\_\_\_\_\_)

質問 8 2つ以内で……第1位 ( ) 第2位 ( )

質問 9 印象に残っている理由……(\_\_\_\_\_)

質問 10 ( )

質問 11 前の質問で「3」「4」を選んだ人の意見……  
(\_\_\_\_\_)

質問 12 ( )

質問 13 前の質問で「1」から「4」を選んだ人…… ( )

質問 14 (ア) ( )  
(イ) 前問で「1」を選んだ人…… ( )  
(ウ) 前問で「3」を選んだ人の意見……  
(\_\_\_\_\_)

(エ) ( ) (オ) ( )

質問 15 (ア) ( )  
(イ) 前問で「1」or「3」を選んだ人…… ( )

「7」その他を選んだ人の意見……(\_\_\_\_\_)

質問 16 (ア) ( ) (イ) ( )

質問 17 ( )

質問 18 (ア) ( )  
(イ) (ア)の質問で「1」から「3」を選んだ人 …… ( )  
(ウ) (ア)の質問で「4」or「5」、(イ)の質問で「3」を選んだ人 …… ( )

最後の2問は、(ア)の質問で「1」から「3」、(イ)で「1」か「2」を選んだ人へ  
(エ-1) …… ( )  
(エ-2) 前問で「2」を選んだ人…… ( )

「5」その他を選んだ人の意見……(\_\_\_\_\_)

質問 19 (ア) ( 調)  
(イ) (曲 名…… )  
(ウ) ( )  
(エ) ……1の音 ( ) 2の音 ( ) 3の音 ( ) (オ) ( )



注

(2011 年 4 月 28 日提出)

(2011 年 5 月 20 日受理)

1. 質問紙調査の質問項目が決定するまでに、筆者が担当する「音楽科教育研究A」「音楽教育学演習A」を履修した学生たちから質問内容や書式について意見を聞き、またここ数年にわたり「音楽科指導法A」で実施した回答結果の分析を試みながら、毎回加筆・修正を行ってきた。
2. 東京音楽大学での平成22年度開講された「音楽科教育法」(複数の教員で担当)で、筆者は2つのクラスを担当することになった。器楽科ピアノ専攻の学生中心のクラスであったが、わずかに声楽専攻4名、科目等履修生1名が含まれていた。
3. 埼玉大学教育学部・学校教育教員養成課程は、現在全16の講座(専修)で組織されている。そのいずれかに籍を置く学生にとってこの授業は必修科目であるが、表1から3には8講座しか記されていない。その理由は、毎年この授業は履修者が多く、前期・後期それぞれ2本の同じ授業を開講して、二人の教員が分担しているためである。つまり平成22年度教育学部時間割表の組み分けから、伊藤はこの8講座の学生のみを担当することになったからである。
4. 本調査において、小学校の歌唱共通教材のなかから《茶つみ》を選択した理由は、3年前に卒業研究を指導した学生が行った調査結果を参考にしたからである。この調査は、10曲の文部省唱歌をピックアップして、学習定着度調査を音楽科指導法A履修学生対象に行ったものである。卒業論文では、この調査分析から《茶つみ》を学習したと回答した割合が72%、さらに曲名と冒頭調出しの歌詞の正解率も42%であり、他の9曲と比較して記憶の度合いが群を抜いて高いことが報告されている。

参考文献

- 伊藤 誠(2008)「音楽科教師に求められる実践的指導力 - 教員養成の充実と改善に向けて -」『音楽教育実践ジャーナル』(日本音楽教育学会)第5-2号, pp.51-57.
- 酒井美恵子(2008)「新学習指導要領に向けた音楽科教育法の課題」『国立音楽大学 研究紀要』43, pp.125-135.
- 新山王政和、滝藤友美(2010)「音楽の諸要素と向き合わせることをめざした新しい視点からの学習指導案モデルの開発 -小学校学習指導要領(音楽)の「共通事項」に対応したモデル案作成の試み-」『愛知教育大学研究報告』59(芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編), pp.1-10.
- 蓮見絵里(2009)『初等科音楽における歌唱共通教材の位置付け -学習定着度調査からの分析と考察-』(2008年度卒業論文).
- 三村真弓(2009)「言語力の育成をめざしたこれからの教科教育: 音楽科授業における言語力とは何か」(第34回日本教科教育学会全国大会(宮崎大会)シンポジウム)『日本教科教育学会誌』31(4), pp.43-46.

# **Analysis and Discussion of a Questionnaire Survey on Memories and Impressions of Music Classes: Focusing on Responses by Students in Other Special Courses (Non-Music Majors)**

**ITO, Makoto**

Faculty of Education, Music Department of Education, Saitama University

## **Abstract**

This paper analyzes the results of a questionnaire survey conducted in the 2010-2011 Music Instruction Methods A class from a variety of angles. The survey was implemented in class during both the first semester (on Monday, April 19) and the second semester (on Monday, October 18). Aside from these two days, 23 second-year music majors from the Department of Education who were enrolled in the Music Instruction Methods D class and 49 third-year students (nearly all piano majors) who were enrolled in the Music Education Methods class at Tokyo College of Music, where the author teaches part time, cooperated in the survey. One of the objectives of this research was to compare the responses of these students, who have extensive everyday involvement with music, with those of 221 students majoring in other subjects who were enrolled in the Instruction Methods A class.

Instruction Methods A is an educational instruction methods class for elementary special subject teaching. For students enrolled in the school education teacher training program, this is a half-semester two-credit course that is required for graduation. In the “educational purpose and goals” column of the syllabus for this class, the author included: “I wish to draw out and cultivate in each student the ideals, knowledge, and desire needed in order to teach music.” Due to the nature of subject pedagogical methods, time for trial lessons is also an important component; however, because music is also an academic subject (even though the Chinese characters for music mean “enjoying sounds”), the author above all wishes to convey the fact that music involves a number of inherent norms and conventions. When it comes to figuring out how to convey this to children, many students simply look for a way to conduct a “flawless” class. Is this really the right kind of stance to take? This is one of the difficulties with courses in practical skills subjects. As for what kinds of goals to set and what kinds of instructional content to require for the class, it cannot be said that the results of this survey revealed all of the clues needed to resolve these issues. However, from the standpoint of an instructor, I feel that without knowing even a little bit about their various musical experiences or their impressions of music classes accumulated over nine years, one cannot develop a personal view or belief about the essential nature of course teaching methods.

When today's university students were in the process of completing their compulsory education, a new view of academic ability was just beginning to emerge, along with the implementation of policies that reduced study content with the aim of achieving education that encourages individuality. The area of life environmental studies was developed and moral education was enriched with the goal of cultivating citizens who can address changes in the social environment on their own. While the idea itself was commendable, did this generation truly receive a sufficient education during those formative years, when the formation of academic capability is crucial? The author is also not alone in suspecting that the "music theory" aspects that are essential to understanding Western music have not been handled carefully in music curricula.

The main sections of this paper are as follows: Introduction, Problems, On Tallying and Analyzing the Questionnaire Surveys, Existence/Lack of Piano Learning Experience, Grade Distribution in Music Classes, Influence of Specialized Music Teachers, Using the Ministry of Education School Song "Chatsumi" (Level of understanding differences between two singing methods and rate of correct scale name identification), Existence/Lack of Opportunities to Study Music Theory, Memories of percussion instruments, Conclusion.

**Key Words** : Elementary special subject teaching, percussion instruments, music reading ability, Ministry of Education school songs, music class teachers